

1 条件設定に当たって

授業では、子どもが一人で表現をするよりもクラス全体やグループですることが多い。表現に至るまでの過程で、互いにかかわり合い、それぞれの表現を聴き合ったり、思いや意図を交流し合ったりして、友だちの様々なよさを自分に取り入れるだろう。その過程の中で、よりよい音楽表現を目指すことができる子どもを育てたいと考え、テーマを設定した。そこで、かかわりを生かしよりよい音楽を目指す時に必要な条件は、下の三つであると考えた。

- ・条件A 音楽の表現の仕方・感じ方や 考え方の相違点・共通点に気づくことができること
- ・条件B 課題を見出し 解決しようとする事
- ・条件C テキストの適切な活用ができること

この3つの条件は、音楽の基礎的、基本的な技能や知識を習得することを土台として成り立つと考えた。

音楽を表現して伝えようとする時、知識や思いをどんなに多くもっていたとしても、それを表現する技能がなければ、相手に伝えることができない。よって、自分の思いを伝えようとする時には、表現するための技能や知識を習得することが必要となってくる。表現する技能が高ければ高いほど、思いを伝えることが容易になるであろう。

また、考え方や思いを言葉で説明する時には、音楽を形づくっている要素（音色、リズム、速度、旋律、強弱、拍の流れ、フレーズなど）の言葉を使うと、わかりやすく具体的に説明することができる。よって、音楽を表現する時に必要な知識や技能を習得することで、相手に考えや思いをより正確に伝えることができ、音楽表現に有効だと考えた。

音楽の基礎的、基本的な技能や知識を習得することにより、相違点や共通点に気づくことができるようになる（条件A）。その相違点や共通点から課題を見出し、解決する方法を探ろうとすることにより、よりよい音楽表現に近づく（条件B）。また、テキストを活用することができるようになると、学習過程を振り返ることができるようになり、音楽表現に有効に働くであろう（条件C）。音楽の基礎的、基本的な技能や知識を習得し、上記の三つの条件が成立した時に、子どもたちがそれぞれの経験の中から得た知識と合わせ、かかわりを通して、課題を解決し新しい表現の創造につながったり、よりよい音楽表現ができるようになったりすると考えた。

2 条件について

- ・条件A 音楽の表現の仕方・感じ方や 考え方の相違点・共通点に気づくことができること

様々な音楽表現と自分の表現を比べることで、お互いの感じ方や考えを交流できると考えた。かかわりを通して、お互いの感じ方や考えが同じ場合は考えを共有し、感じ方や考えが違う場合は、その理由を問うこともあるだろう。また、個人の考えに自信がもてなかった場合でも、グループ活動や広く意見を聴くかかわりの場において、友だちの意見を聞いて納得したり、違う意見をもったりすることによって考えに自信をもつことができるだろう。この条件で、考えが深まり、話し合いが活性化すると考えた。

- ・条件B 課題を見出し 解決しようとする事

実際の授業場面では、教師から与えられた課題に取り組むよりも、自分たちで課題を見出し、解決しようとする事が重要であると考えた。学習過程の最初は、範唱・範奏や友達の演奏から自分との相違点や共通点を見付けたり、聴き取ったりして、課題が明らかになっていくことだろう。例えば、子どもが「なぜ〇〇さんのような演奏にならないのだろう」と疑問に思い、「ここは〇〇さんと同じだけど、ここが違う」とヒントを見付け、「〇〇さんのように演奏するにはどうしたらよいだろう」と何を解決すればよいのかを考え、練習する。そうすることで、よりよい演奏になっていくと考えた。

その後も、子どもは「自分の思いを伝えるためにはどうすればよいだろう」と考え、新たな課題を見出す。「どうしたら伝わるのだろうか。」と解決方法を考え、いろいろと試しながら、「自分らしい表現」をつくり上げていく。このように、子どもが一つの課題解決で満足することなく、課題解決した結果を次につなげ、新たな課題を見出せるように発展性のある教材設定や題材構成の工夫が必要であると考える。

・条件C テキストの適切な活用ができること

音楽科におけるテキスト*とは、楽曲の楽譜だけでなく、子どもが自分に分かるように記したオリジナル譜、範唱や範奏のCD、友だちが表現したものなど、幅広くとらえている。学習過程によって必要とされるテキストは異なるだろう。学習過程の最初は、イメージをもたせるために主に範唱CDや楽譜をもとに学習する。その後の試行錯誤の段階では、後で同じ演奏をするために楽譜に記したり、記したものを元に改良したりすることによって活用する。このように、形として残らない音楽表現を可視化することにより、よりよい音楽表現を目指すことができると考えた。

* 金沢大学附属小学校研究紀要第63集 音楽科論 音楽科テキスト参照

3 おもな実践

実践として、第1学年の「リズム伴奏づくり」と第3学年の「リコーダーとなかよし」を取り上げ考察する。

第1学年では、4月から音楽に合わせて身体表現をしたり、リズムあそび、ふしあそびなどの音楽あそびをしたりして拍の流れや速さを感じとる学習を進めてきた。リズムあそびでは、同じ拍の流れや速さの中で、教師や子どもがたたくリズムの模倣をしたり、子どもが作ったリズムをリレーしたりして楽しむことができた。普段からリズムあそびをしている学級もあり、比較的簡単にリズムの模倣や、互いの音を聴き合い、拍を感じることができた。

第3学年では、5月からリコーダーの練習を始めた。一学期は、リコーダーの演奏の基本を習得することが中心となった。リコーダーの教則本に沿ってソ・ラ・シの運指を練習し、7月にド・レの運指を練習し始めた。まだ、タンギングやアーティキュレーションが上手くいかない子どもや、リコーダーの穴と指の間に隙間があいてしまい、なかなか正しい音程が出せない子どもがいる。

両学年とも、一人一人が考えをもち、お互いの考えや表現を聴き合い、質問や意見を投げかけるような活発なかかわりを経て、よりよい音楽表現になることを目指し、次の(1)~(4)の実践に取り組んだ。

(1) リズム伴奏づくりを通して（1年・リズム）

リズムあそびも慣れた5月頃から、○で書いたリズム譜を板書し、教師がたたいてみせると子どもたちは、すぐにリズム譜を理解し、いろいろなリズム譜を組み合わせて学習を進めた。また、曲に合わせて身体でリズムをとったり指揮をしたりしながら、リズムを感じている子どもの姿も多く見られるようになっていた。教科書の「ぶんぶんぶん」や「きらきらぼし」のリズム譜も、拍を感じながらすぐに手拍子を打つことができた。

そこで、「ぶんぶんぶん」でリズム伴奏づくりを試みた。自分のリズムを友達に伝えるとき、友達のリズムを理解するときリズム譜を使用することにした。ワークシート上でできあがったリズム伴奏を、4人のグループで発表した。子どもは、リズム譜を見ながら、自分でつくったリズムを練習したり、書き変えたりして、作り上げていった（資料1）。リズム譜を記すことのよさを子どもの姿からとらえると、以下のようなになる。

- ・自分の考えたリズムを形にして残すことができた
- ・自分の考えたリズムを再現したり、それをもとにリズムを変えたりすることができた
- ・友達に自分の考えを伝えたり友達のリズムを理解したりするときの手がかりとして、リズム譜を位置づけることができるようになった

ぶん	ぶん	ぶん	■	はち	がと	ぶん	■
○	○	○	●	○	○	○	●
あい	けの	まわ	りに	のぼ	らび	せい	たよ
①	①	○	○	①	①	○	○

資料1 リズム譜

リズムづくりの場面で、自分の思いに近づけようと何度

も考え直す姿が見られた。また、リズム譜と違うリズムを演奏する子どもには、他の子どもが教えたり、一緒に演奏したりする姿が見られた。このように、リズムを楽譜に記すことで、自分自身の考えを見つめ直したり、相手に伝えたり、相手を理解することが容易になり、表現する際に有効であると考えられる（条件C）。

(2) 曲の練習を通して（3年・リコーダー）

曲の練習には、レベルに応じた曲がたくさん載っているリコーダーの教則本を使用した。自分たちで課題を見出し効率的に練習できるように、この教則本と次に挙げるチェック表（資料2）を使用した。チェック表の項目は、以下の5つである。

曲名	チェック項目					日付
	かし	タンギング	ドレミ	リコーダー	せんせい	
なべなべそこぬけ	○	○	○	○	○	5/2
なべなべ	○	○	○	○	○	5/2
なべなべ	○	○	○	○	○	6/1
なべなべ	○	○	○	○	○	6/8
なべなべ	○	○				
なべなべ						

- ① かし：歌詞で歌うことができる（リズム、音程をとるため）
- ② タンギング：「トゥ」で歌うことができる
(タンギングを意識させるため)
- ③ ドレミ：音名で歌うことができる
(楽譜を読むことができるように)
- ④ リコーダー：リコーダーで間違わずに演奏することができる
- ⑤ せんせい：「先生チェック」は、教師がチェックをし間違わずに演奏できたら合格である。

使い方は、①～④までは、ペアの相手に聴いてもらい、間違わずに歌えたり演奏できたりしたら、○をもらう。①～④の項目すべてに○がついたら、教師がチェックする。すべてをクリアした後に、子どもが自分で合格した日付を記入するものである。

このチェック表を使うことにより、いっしょに吹いて練習する姿や、わからない子どもと一緒に指を動かすことで教えようとする姿など、かかわり合う姿が多く見られた。

資料2 リコーダーチェック表

のようにまとめることができる。

- ・聴いてもらう相手がいることで、チェック項目の内容を意識でき、互いに聴いたり、演奏したりして聴き比べることができるようになった（条件A）
- ・互いに教え合ったり、アドバイスをしあったりする姿が見られ、かかわりが進むにつれて、チェック表の○の数が増えることを自覚できた
- ・チェック表に記入することで、子どもは自分の進捗や課題を一目見て分かることができ、効率的な練習につながった（条件B）

これらの様子から、お互いの音を注意して聴き合ったり、教え合ったりするかがかわりが充分に行われ、さらによりよい表現を目指すことができた。よって、条件A、Bは、かかわりを生かし、よりよい表現をめざすために適切な条件と考えることができる。

(3) 発表に向けての練習を通して（3年・リコーダー）

(2)のリコーダーチェック表を用いての練習が進むにつれ、タンギングに課題がある子どもが多い実態が明らかになった。「タンギングができる」と答えた子どもは三割程度しかいなかった。タンギングができる子とできない子による3～4人のグループを作り、「なべなべそこぬけ」をリレーでつなげ発表した。グループの課題は、「タンギングに気を付けて正確にふこう」である。「どんな練習をしたら、グループ全員がタンギングをして間違わずにふけるか考えてみよう」という教師の発問に、子どもたちが自分たちのグループの現状をふまえ話し合い、考えた工夫が、資料3の課題解決のための工夫である（条件B）。

あるグループは、間違わずに吹けるがタンギングができない子どもが多かったので、グループの課題は「タンギングができるようにする」であった。その課題を解決するための工夫は、リコーダーで同じ音でトゥトゥというアンブシュアを意識して何回も吹く。その後、タンギングができる子どもの

音を聴いて同じような音を出す練習を繰り返すことであった。その結果、タンギングができるようになった子どもが増えてきた。

グループの発表は、タンギングができて、正確に演奏できたグループに、拍手をすることで評価とした。課題ができていたグループがいくつかあり、多くの拍手をもらっていた。また、子どもたちの中には、拍手だけでなく、アドバイスや良かったところを伝えた子どももいた。このアドバイスや良かったところがわかったということは、基礎、基本のできている演奏が分かり、比較することができたということである(条件A)。

この後も、リコーダーチェックを続けたが、グループ発表の後には、ほぼ7割の子どもが、タンギングができるようになり、一つ一つの音ははっきりと演奏できるようになってきた。このように、自分たちで課題を見出し解決方法を工夫することで、個人の技術が向上したと考えられる。

① タンギングについて

- ・タンギングができるようになるためにトゥトゥといいながら歌ったりふいたりする
- ・一音一音はつきりとでているかをきく
- ・同じ音でタンギングをれんしゅうする

② まちがわずにふくために

- ・ゆっくりのはやさでみんなでいっしょにふいて、だんだんはやくしていく
- ・まちがえたところを何回もれんしゅうする
- ・ドレミで何回も歌ってがくふを見なくてもふけるようにする

③ つなげるために

- ・みんなの顔が見えるように丸くなってれんしゅうする
- ・音がつながるようにつぎにふく人は音を出さないで指だけを動かすれんしゅうをする
- ・ふく場所が短すぎてつなげるのがむずかしかったので、こうたいするところを考える

④ きれいな音でふくために

- ・いきの強さを考える(弱くてもだめ、強くてもだめ)
- ・いきがためいきのようにならないようにする
- ・同じ大ききでふけるようにグループぜんいんの音の大ききをひとりひとりきいてれんしゅうする
- ・ゆびにすぎまができないようにちゅういしてふく(ピーという音がでるから)

⑤ 同じはやさでふけるように

- ・リズムをとりながら、ぜんいんでいっしょにふいてはやさをおぼえる

資料3 課題解決のための工夫

(4) 二重奏の練習を通して(3年・リコーダー)

一学期間は、リコーダーの基本を含め個人で行う練習が中心だった。タンギング奏が定着しかけたところで、次へのステップへ移るために「かっこう」の二重奏に取り組むことにした。この曲は、二つのパートの出だしが同じため、一緒に始めるための合図を送ったり、互いの音を聴き合ったりといった、より音楽的なかわりが求められる。そこで、意図的にかかわりをもたせるために、「声をだして合図をしない」「相手の音を聴く」というルールを決めた。出だしの入り方は、子どもにとっては難しく、時間をかけて考えた方法が、次の3つである。①一人が右手で指揮をする、②目で合図を送る、③リコーダーを動かして合図をする、である(条件B)。一人が右手で指揮をする始め方が、いちばん出だしがそろいやすく、この方法で始めるペアが最も多かった。また、合わせやすいように立つ位置を決めて練習するペアもいた。始めは上手く演奏できない子どもも、相手の子どもに教えてもらいながら、だんだんできるようになっていった。発表の場では、聴く観点を「出だしの音がそろっているか」「お互いの音を聴こうとしているか」にした。「お互いの音を聴こうとしているか」の観点は、判断が難しかったので「二人の音がそろっているか」に変更した。そろっているか、そろっていないかの評価は、難しくなかったようで、聴きとることができた。また、「出だしはそろっている」と評価した子どもが多かったが、「最後の音は、そろっていなかった」と教師が示した以外の観点をとらえる子どももいた。息のあった演奏がいくつかあり、それらの演奏には子どもたちの評価も高かった。この実践では、二重奏の練習を通してより音楽的なかわりをもち、工夫して(条件B)、成果を出すことができたと考える。

4 今後に向けて

以上の実践より3つの条件を通じたかわりの中で、話し合いが活発におこなわれ、よりよい表現ができるようになった。今後に向けて、3年生は「きれいな音」を追求しながら、発展へのステップとして、いろいろな二重奏の曲やふしづくりに取り組んでいきたい。また、1年生は、他の拍子の曲のリズム伴奏づくりに挑戦していきたい。両学年とも次へのステップへ進む学習過程の中で、子どもたちの今まで身に付けた知識や技能の中から選択、活用し、友達とのかかわりを経て、子どもなりの表現が生まれ、よりよい表現になっていくよう手だてを考えていく必要がある。